
とある最強の創造世界

rubbin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある最強の創造世界

【Nコード】

N7783Y

【作者名】

rubbin

【あらすじ】

学園都市の暗部に存在する「創造世界」

彼と様々な思惑が交差するとき物語は始まる

初めてのssなので緊張しつつタイプしていますw 厨二全開です
お願いします！

あらすじ

どうも初めまして！rubbinです！初めての小説なので、緊張しつつ少しずつかきためていつています。

更新期間がとても短いと思いますが、のんびりかいて行きたいと思うので願います！

ではあらすじを下に書いていきたいと思います。

ここは学園都市。「記憶術」や「暗記術」という名目上で超能力研究。「脳の開発」を行っている都市。

総人口は約230万人。その8割以上が学生がしめている都市である。

そんな都市には暗部と言われる学園都市の表側が普通の学生生活とするなら、その裏側に存在する血塗られた世界。

そんな世界にいるある一人の男の物語。

あらすじ（後書き）

という事とで書いていきたいと思っています。
亀更新かと思いますがお願いします！

序章 始まり。(前書き)

どうもrubbinです！
今回から本編スタートです。

序章 始まり。

ここは学園都市。人口約230万人の埼玉、神奈川、そして東京の三分の一を円形にまたいでいる都市。

その都市では他とは違うことがある。まずは外部との科学の発展の違いだろう。

学園都市では飛行船が飛び、そして自動清掃ロボットが町の中を行き来している。

そしてもつとも違うのが「暗記術」やらなどの題目で「脳開発」をし「自分だけの現実」。

すなわちパーソナルリアリティを身につけることで能力を発現させている。

その能力者は6つの階級に区別されており
レベル0からレベル5までに分かれている。

レベル0はほぼ能力が発現していない。

レベル1は少し能力が発現したほど。

レベル2はさしてレベル1とかわらないほどだ。

そしてレベル3は学校に数人いるようなエリート。

レベル4は軍隊にて利用できるほど。

そして一番上のレベル。レベル5は中隊と一人で戦えるほどである。

七人しかいないレベル5。その第六位「創造世界」

彼は今学園都市の学園長。アレイスタークロウリーと対話していた。

それを他からみたらとてもいびつな空間だろう。

片方の人間は弱アルカリ性のピーカーの中に逆さまにうかんでおり、顔は大人にも子供にも。なんにでもとれる人間。

片方はすべてを飲み込むほどの黒色の髪。そして同様の瞳。髪はシヨートカットというほどではなくまあ首に髪がかかるほど。肌は日本人の平均的ないろをしており、顔は美形より。身長は170cmと一般的である。

「やあ。よくきたね『創造世界』」

「よくきただと？よくいうよ。お前がここに呼んだんだろう。アレイスター」

「ふむ。そうだったね。では手短に用件を話そう」

「なんだ？めんどくさいことは『アイテム』とかにまわしてもらいたいのだが」

「いや。今回は君に表の世界にいつてもらおう」

「なんだと？俺は暗部の最深部と同じ機密コードだぞ。そんなんが表にでていいのか？」

「ああ。今回は幻想殺しの観察、そして行動を誘導をしてもらいたい。期限はない。それにその間にも暗部の仕事はやってもらう」

「あーわかったよ。だが俺にはIDがないぞ。どうするんだ？」

「それは私が発行しておこう。住居は第七学区のとある寮だ。それとIDは後で君の家に送ろう」

「わかった。詳しいことはまた後でいいな？」

「ああ。よろう。では頼むぞ『創造世界』」

「ああ。まかせろ」

そう『創造世界』はいうと虚空に消えた。その消えた後アレイスターはつぶやく。

「ふむ。これでプランがまた一步前進だ」

何もない空間にアレイスターの独り言がただ響いてた。

序章 始まり。(後書き)

では序章 始まり。 どうでしょうか？

感想、それと文字のミスを指摘していただければうれしいです。

第一話 邂逅（前書き）

ども。書いていきます！

第一話 邂逅

（たつくめんどくせえったらありやしねえ…）

アレイスターにある依頼をされてからその為の下準備を行ってきたがまさか受験をさせられるとは思ってはいなかった。

受験するために必要な願書を持ち『創造世界』はとある郵便局へ心の中でアレイスターへの恨み言葉を並べつつ、寒い中歩いていた。

「おい。なんだこりゃ」

『創造世界』がとある郵便局へついた時その郵便局は平日のさらに真っ昼間というのにシャッターが落ちていた。

『創造世界』はなぜシャッターが落ちているのかと考えていると横に少女が突然現れた。

（っ！！！！……いやただの少女か。だが油断はできない。それとこいつの能力は瞬間移動か？）
と考えていると横の少女が

「…えっ？ここは外？ということは…白井さん！！！！どうして私だけ外にだしたんですか！！」

と泣きながらとある郵便局のシャッターを小さな握りこぶしで叩き始めた。

（ということは。中でなにか事件が発生してるのか）

「おいお前。中で何があった？」

と『創造世界』は少女に話しかけた　すると

「お願いします！！白井さんが私だけを外に出して！！！！白井さんが危ないんです！！！！」

と涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら叫んだ

「落ち着け。まず中で何があったのかを説明してくれ」

「えっぐ…ひっぐ…え、えっと郵便局によったら強盗が現れてそしたら白井さんが強盗を捕まえようとして…ひっぐ、そしたら強盗が能力を使つて白井さんを攻撃して…それをかばった白井さんの先輩が怪我をして…ひっぐ、ひっぐ…それで強盗は私を人質にして、それを白井さんが助けてくれたんですけど、白井さんが危ないんです！！！！」

「えっと、じゃあその白井さんは風紀委員？」

「はい…見習いですけど」

（話を聞いたところその白井さんって子はレベル3か4っていったところか。それでこの子を助けて中に一人のこったと）

「んで俺にその子を助けてほしいと？」

「お願いできるのですたら…」

「はあ…」　つと『創造世界』はため息をつきつつ（泣きながら女の

子に頼まれちゃ断れないよな…)

「わかった。俺が助けてきてやる」

「本当ですか！お願いします！！！」

と勢いで白井さんを助ける事にしてしまったが俺が能力を今使っているのだろうか。いや。だめと言われても使えないだろう。ここでたすけなかったら男が廃る…。よしやるか。

第一話 邂逅（後書き）

超電磁砲のあったロリ白井とロリ初春の郵便局の事件です。
次回戦闘開始です！

第二話 これが『創造世界だ』だ。(前書き)

どうも！今回ものんびり書いていききたいと思います！

第二話 これが『創造世界だ』だ。

「えっと、それで君の名前は何かな？」

「いつもより表情を柔らかくし、ニコッと自分の中で笑ったようにして聞いた。」

「え？私の名前ですか？私は初春です。初春飾利です」と少女、いや初春はにっこりと俺に微笑んでくれた。

（よかった。泣き止んだのか）

と心の中で一息つくと『創造世界』は自分の能力を思い出し

「飾利ちゃん。ちょっと俺から離れてもらえる？」

「えっ？なんでですか？」

と初春は俺がまるで自分のことが嫌いになったのか？というような目でこちらを見た。

「いや、俺の能力はさ周りを巻き込んだりうかもしれないからさ」

「はい！わかりました」

と初春は元気よくいうととてとてという擬音が似合う走り方で少し離れたところにいった。

「じゃあさて。始めるか」

「へへ。最初は瞬間移動だからビビったが自分を転移できないんじ

や意味がないな」

と強盗は笑う。

そして強盗はポケットに手をいれ、パチンコボールを投げる。

「そんな玉が私にあたるとでもお思いですか？」

「いやあ、別にお前に当てようとは思わないさ。ただ俺はもう金をゲットした。だからもう逃げればいいのさ」

白井は会話をしつつ目の前に迫っていたパチンコボールをよける。すると、うしろからバキッ、バキッと音がした。

白井が驚いて振り向くとシャッターが壊れていた。

「なっありえませんか！あれは学園都市製のシャッターですわ！そんなのをたかがパチンコボールで壊せるはずがありませんの！」

「いやー俺の能力を使えば問題ないんだよな。俺の能力は絶対等速。投げた物体が壊れるか俺が能力を解除するかまでは、前に投げた物体はすすみ続ける」

「くっ、シャッターが壊れてもあなたを外に出さなければいい話ですの！」

「いやーあまいな！。お前は小学生、だが俺は大人だ。圧倒的な肉体差があるのさ！いくら瞬間移動を試そうともお前が俺に触れなければ意味がない！」

その瞬間その銀行が白に包まれる。

「くっ、ここはなんだ！」

「んー俺の作った世界かな？」
と呑気な声が聞こえた。

その世界はすべてを埋め尽くす白。とにかく白。上も下も左も右も。
どこを見ても白。

そして絶対等速は声のしたほうをみた。
そこにいたのはこの世界の対局に位置するような真っ黒な存在。

顔も、目もすべて黒。皮膚はただ日本人の標準的な。
そしてその男は口をゆがめていう。

「強盗さん。俺を楽しませてくれよ」

そのころ、銀行の中で白井は驚いていた。

なぜなら銀行が白に染まったと思うと強盗がいなくなっていた。

「くっ、強盗はどこにいったんですの！」
どれだけ叫ぼうが強盗は現れない。

だがシャッターは壊れていない。

「どこにいったんですの？」
ただ銀行の中にとらわれていた人は疑問しかいだけなかった。

絶対等速は逃げていた。

どこに逃げればいいのか。そんな疑問もなく目の前にいたただ真っ黒な存在から逃げようとしていた。

だがどこに逃げても目の前にあいつが現れる。自分の能力を使って攻撃をためす。だが投げた球も進んだと思うと下へ落下していく。

「くっ、お前はなんなんだよ!!!」

と絶対等速は叫ぶ。

だが返事は帰ってこない。

そして闇がただ真っ黒な存在からきたと思うと

絶対等速は気を失った。

ごとん。という音がしたと思うと目の前に強盗が現れた。

強盗は意識を失っているのか動かない。

「誰がこんな事をしたのですの？」

やはり白井の頭の中には疑問しか残らなかった。

そしてこつんという音とともに虚空から全身が真っ黒な男が現れた。
そして男は

「君が白井さんかい？初春さんに言われて助けにきたんだけど」
と優しそうな笑みを浮かべ話かける。

「初春が…。そ、それと助けに来てくださってありがとうございます」
「す」

「いや、それほど」

と男は照れながらも返事をした。

「それと聞きたいのですが、強盗はあなたが倒しましたの？」

（俺が倒したというと面倒なことになるな。ここは俺の能力は瞬間移動ということにしておくか。）

「いや、俺じゃない。俺は今瞬間移動を使ってこっちにきたばかりさ」

「そうです。ならいったい誰が…」

と会話しているうちに警備員が到着したのか外には警備員の車のサイレン音が聞こえていた。

「白井さんは大丈夫そうだし俺はもう行くね。今度から気をつけるんだよ」

「はい。今回は私の独断専行のせいで…」

「それと反省するだけじゃなく、それを次にいかさないと意味がないよ」

「わかりました。次から気をつけますの」

と笑みを浮かべ白井は宣言する。

（これであの子の願いは完了したかな？警備員に俺のことを書庫

で調べられてもめんどうだし、逃げるか）

「じゃあ俺は行くね。ばいばい」

「はいですの！」

というただ真っ黒な男は虚空に消えた。

残った後白井はあることを思い出し叫んだのはまた別のお話。

第二話 これが『創造世界だ』だ。（後書き）

今回はまだ『創造世界』の能力は露見させませんでした。
次は『創造世界』の能力説明です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7783y/>

とある最強の創造世界

2011年11月28日01時54分発行